

学校放送の教育性について

吉 村 喜 好

マスコミュニケーションと学校放送

現在我が国におけるテレビ受信機の普及はまさに恐るべきもので、経済力では未だ欧米先進諸国に後塵を拝しているにもかかわらず、テレビ受信機保有絶対数においてはアメリカ合衆国に次いで世界第2位であり、人口普及率からいってもドイツ、フランス、イタリー、ベルギー、オランダの上位にあるという有様である①。それだけに、そのテレビが我々人間社会に与えつつある有形無形の影響について社会心理学者を初め教育学者、その他の人達の不安な眼がそゞがれているのも当然であろう。

テレビが我々人類に与えつつある計り知れない影響については、遂次諸学者の調査研究によって解明されつつあるが、何れもその功罪共に我々人間の将来の性格、行動、態度形成に無視出来ない力をもって我々に攻めて来ていることを示している②。本を読まなくなった子供、テレビから汚ないことばを真似ている子供、或いはテレビが犯罪や性愛、怒りなどをさりげなく示すことによって油断のならない害毒を流していることに気がつくとき、誰でも一度はテレビを家庭から放逐したらと考えるものである。しかしこの考えは決して、成功しないし、長続きもしない。テレビのある社会からテレビを放逐することは恐らく大きな社会革命かそれに類した大事変か起らない限りは不可能であるかもしれない。

このように現代社会においてテレビの存在を否定することは到底実現不可能な事で、唯残された道は、テレビを肯定し共存するための有効な活用法なのである。

放送の内容は大体、娯楽、教養、報道、教育の四分野に分けられ、我が国は特に商業放送と、公企業体のNHK放送の二面によって放送が行われているので、娯楽番組はいうまでもなく、教養、教育番組に於いても世界有数の内容の充実振りを示している。

しかし乍ら、教養放送や学校放送のように質的にレベルの高い番組が放送されていても、この視聴率を一般娯楽番組と比較すれば恐らくその十パーセントにも満たないであろう。一般大衆は、如何に多彩な教養教育番組が放送されていようとも、彼等が視ているものの殆んどは娯楽番組で、教養放送の利用はその中の限られたエリート達によってのみ利用されていると考えられる。しかも教養放送が社会教育的意味をもつものであるとするならば、むしろ、既に教養の高い一部エリート達によって利用されるのではなく、教養を高める必要のある階層に利用して貰う必要があるのであるが、いまの状態ではその可能性は殆んど望み薄だといわねばなるまい。

ところで学校放送の問題を論ずる場合、こゝでは先づ第一に教育との関係のみ、ついでマスコミュニケーションという視点からみてみようと思う。

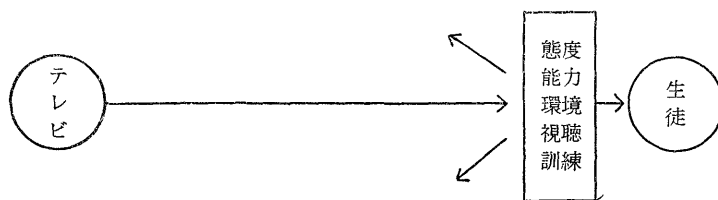
教育とは周知のように「価値実現のため他人に意図をもって働きかけこれをのぞましい姿に変

化させる活動」③をいうであって、必ずしも学校といった特定の場所とか施設とかを必要とし^ないのが広義の教育の意味である。放送の意味もこれに近い、たゞその価値実現ということが人生の余暇的題問や娯楽的方向にはしるか、或いは、人間社会の向上発展といった方向に向うかによって娯楽放送、教育、教養放送の別が生じて来る。

一方マスコミュニケーションという視点によって放送を捉えると、コミュニケーションは元来ラテン語の *Communis* つまり「共通のもの」という概念で、情報、思想乃至態度を共通しようという語源から初まって個人間の意志や行動も変容するための刺戟を送るプロセスであるとする。④これが所謂マスコミュニケーションになると、「メッセージが公的になり、狭い範囲の個人間に限定された受信者に対してではなく技術的伝達手段を通して間接的に、かつ一方的に分散している不確定大衆に伝達されるコミュニケーションの型態」をいであうのである。

そこで教育が我々の行為を価値ある方向に変革させようとする活動を意味するならば、その活動の通路がマスコミュニケーションによって行われるものが学校放送であるといえよう。教育活動というコミュニケートの典型的な型は、先づそれが、教える人と教えられる人の一対一の関係であり、距離的に相手と接近しており、相互に精神的に深いつながりがあり、両者に十分なコミュニケートが行われるということである。しかし学校教育という集団教育が行われるようになってくると教師と生徒達という複数の関係になり更にそれには、教師、生徒間と同じく生徒相互間の教育作用が重視されてくる。この場合でも *face—face* の原理や両者の間の十分な交流、相互の精神的理解が行われていれば、教育活動の効果を上げることが可能であろう。しかし、マスコミュニケーションという形による教育になると、例えばテレビ教師と生徒間の人間的接触は全くなく、そこにあるのは、テレビ教師から生徒への一方向的、瞬間的片流のみであって従来の教育の概念ではマスコミュニケーションによる教育を完全な教育活動として認めることは困難であるといわなければならない。そこで私は、次の様な図式で学校放送の教育活動を考えてみた。

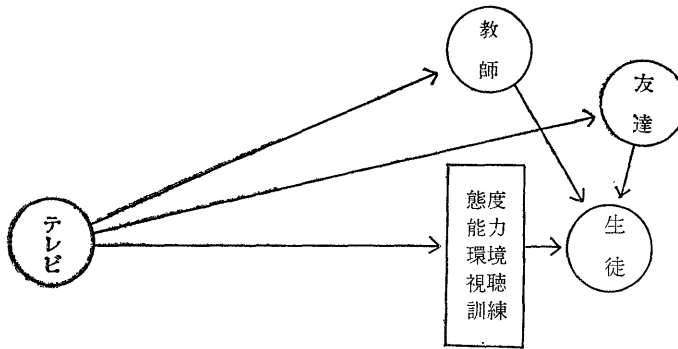
(第 一 図)



学校放送はテレビから生徒への思想の流れとして捉えることができる。この場合その流れは、生徒の心の中に無条件で入っていくのではなく、生徒のその場に於ける学習態度や、彼の本質的な能力とか、環境の好し悪し、或いは視聴訓練の有無が、媒介変数となって生徒の学習完結の度合いが違ってくる。この条件は必ずしも、テレビその他マスコミだけでなく、コミュニケーション一般についても同様のことが考えられる。

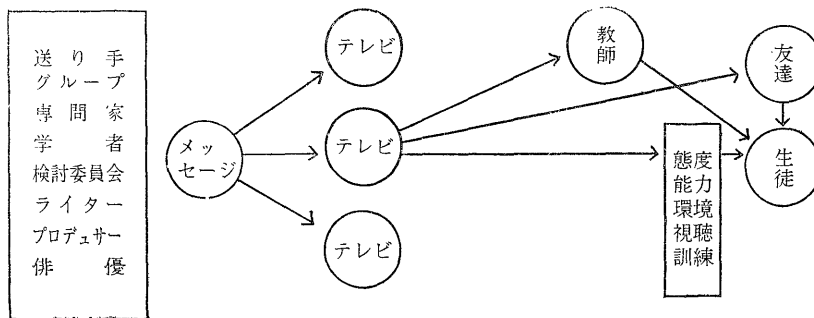
コミュニケーションのプロセスとして普通一般には「誰が(送り手)」「何を(放送内容)」「何を(効果)伝える」という直接的図式で考えられていたが、ラザースフェルト、ヤカツ、⑥クラッパー⑦等の研究によりこのプロセスはこの様な単純なものでないことが明らかにされている。

第 二 図



即ちマスコミの内容は送り手から受け手にそのまま直線的に届けられるものではなくて、両者の中間にある諸原因と諸影響の連鎖を通して一定の効果を与えるものでその一つが（第一図）で指摘した *in personal* な条件で、今一つは教師とかそのグループで指導的立場にある生徒間の *interpersonal* な関係である（第二図）このフィルターを通してテレビの送り内容は生徒に到着するのである。換言すれば *Opinion Leader* が放送内容を如何に受取ったかが、グループメンバーの放送内容の理解に大いに関係があるということで、この考えかたからすると学校放送という学習型態でも、教室教師の存在は、その教育の一つの可能な条件であるということが出来る。

第 三 図

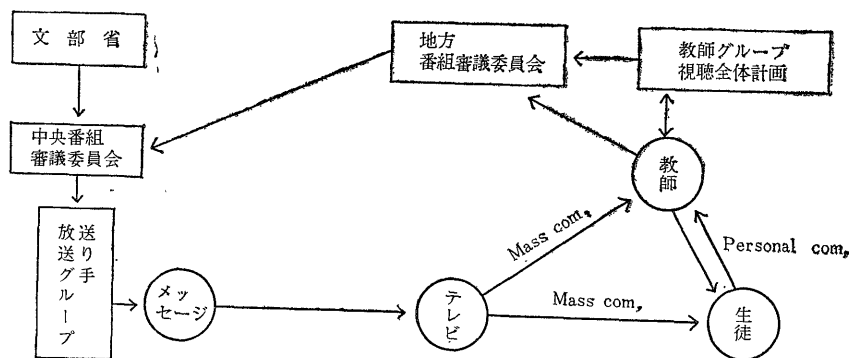


我々が教室で接しているテレビそれ自体は送り内容（メッセージ）を運ぶ媒体物（メディア）にすぎない。（第三図）我々の必要な送り内容は、テレビというメディアを通して、教室に伝わってくるのであってそのメッセージを作っているのは送り手といわれる一団のグループである。此の中には、ライター、プロデューサー、俳優等は勿論、番組検討委員、専門家、学者等が含まれる。これら送り手は受け手の大衆に対して常に少数者であり、しかもエリートの立場に立つこともマスコミュニケーションの一つの特性である。その意味からいえば、マスコミュニケーションの伝達型態は専制的な絶対君主制の政治体制を思わせる。この様な体制でも送り手が真に大衆の利益を考える人々であったならば立派な効果を発揮することができるが、利己的な考や、商業主義的な損得計算だけで送り内容がきめられていくと、マスコミュニケーションとしての教育性は非常に脆弱なものになってしまう。我が国が、イギリスと同じく、NHKという半官半民の企業体によって学校放送の運営が行われているのは、此のようなマスコミの特質の

上に立った考慮から出たものと思われ、資本主義の欠陥を補い、正しい方向に教育を進めていける可能性を此の機構の中に期待することができると思う。

次に、教室教師の毎日の授業はいうまでもなく、文部省発行の学習指導要領に準拠し、又地方教育委員会や学校長その他の指導や話し合いのもとで、具体的な学習が展開されているわけであるが、何と云っても、子供と直接に触れ合うことのできる教室教師のもつ指導能力が教育では最も、大きくものを言う。学校放送に於いては、同じく指導要領に準拠して、番組審議委員会に於いて、内容方法共入念な検討が行われ、最も学習に有効な方法でメッセージが作られる。一方、受け入れ側の方には

(第四図)



放送内容についての全体計画を学校で作られることもあるし、内容についての数々の批判は、地方番組審議委員会を経て放送グループの中に生かされる仕組みになっている。これはマスコミとしての放送の送り形式に些かなりとも反抗を示し乍らその教育性を補強したものと考えてよからう。又視聴内容について、視聴前中後その他色々の機会を捉えての教師と生徒との **Personal Communication** は教室教師がテレビ教師の一方性という欠陥をこゝでも又補強する役目を果たしていると考えられる。こうして学校放送は、マスコミとしての非教育性を是正していく努力をしているのである。しかし、普通マスコミの主な放送内容といわれる娯楽放送と学校放送の質的差異を考えておくことが、最も大事な事である。本来放送とは「国民が教養情操道徳による人格の向上をはかり、かつ合理的精神と科学的態度を養うのに役立つ」⑧べきであり、我々は大衆に対し善きもの、必要なもの美しきものを提供するように努力すべきことが当然望まれていなければならない。しかし乍ら現実には、むしろ絶えず視聴者の歓心を買うような番組を作るために努力がなされ、商業放送の場合は、自社の番組に対する視聴率を高めてスポンサーに対する信頼を高めることが最大の関心事にならざるを得ないので、番組はどうしても大衆の最大公約数的な心理に訴えてセンセーショナルな興味本位のものになり勝である。これが今日のマスコミの特質であり欠陥であるといえよう。しかし学校放送は視聴率に拘われる必要もなく、従って受け手の児童生徒に媚び諂う必要も更になく、たゞひたすらに、テレビの特質を生かした、学習効果のある番組を作ることに専念すればよいので、同じマスコミュニケーションによる伝達内容といっても、それが娯楽放送か学校放送かによって一方は受動的で只面白きける内容が送り出され他方では、それに反応し思考を働かせざるを得ない内容になってくるので、唯テレビだからといって、マスコミ

は非教育的性格だときめつけることは出来ない。要は送り手の意図であり、しかもそれは多分に受け手の視聴態度によってきまってくるものである。

学校放送の教育性に対する問題点

こゝでいう教育性とは、一般にいわれている教材性を含めて、それに self-education の可能性、即ち「テレビが教育する」可能性を含めて考えていきたい。

I 受動性ということ。

テレビ、ラジオの伝達の特性として、一方向的、瞬間的（一過性）予め内容の検討の困難性等は、受け手の積極的精神活動を阻害し、あるものをそのまま受け入れようとする態度が生じ易い。それは文字等の活字メディアによって要求される「読む」ということが精神の緊張を統制し、あらかじめ読む当人の積極的な構えを必要とするのに対して、放送に於ける視聴においてはそれほど大きな精神的エネルギーの消費を必要としないところから行動や態度が次第に受身的なものになっていくという考え方である。しかし受身的ということは決して受身ということではない。例えどんな単純な放送内容であっても、それを理解するという精神活動は決して受け身の働きでは不可能である。即ち知覚段階では完全な能動的活動である^⑨と考えるのが心理学の定説である。

しかし、一般に放送の視聴が受動的であるときめつけているのは、それが主として無差別、無選択、興味本位の受け取り方を強いられ、活動性、自発性、創造性を欠く無批判、無気力な人間を作り出しているのではないかという現実の現象に対する恐れを予測するからに他ならない。しかしこの様なことはむしろ放送に接する側の人々の態度や期待によって大きく左右されるもので、放送自体の機能として考えることは問題があると思われる。若しもこれが放送の本来の機能であるとすれば放送学習は不可能どころか、有害ですらあるといわなければならない。放送はむしろそれに接する人の期待に応じて送り出されているというべきで、娯楽や慰安のみを放送に求める人々にとって放送は最も忠実な娯楽物になるということであってひとたびわれわれがこれによって技術の修得や、知的学習を期待する時も又、素晴らしいサービスを果す機能を持っているもので、受動的にも能動的にも受け手の受け取り態度如何でどうにでも変化する可能性を持っているものとしてみるのが正しいと思われる。そこで若しも「放送は受動的で能動的な学習活動をこれで行ふことは出来ない」と考えている人々があるとすれば、その人達は、家庭に於いて、テレビによる積極的利用の経験がなく、ただ娯楽用として受動的な要求だけを放送に期待していた人々であることを自から吐露していることになる。若しも、その人達がテレビ、ラジオの「そばん教室」でもよし、或いは高等学校通信講座の視聴をその娯楽放送に接する受身的な態度でもってのぞむならば恐らく5分ともたないであろう。

学校放送番組はこの様な放送の特性の上に立って、有効適切な教材を効果的に配列し、有能な教師のもとに学習が展開され、児童生徒は、積極的な意図をもってこれを視聴するように出来ているものである。そこで児童生徒が放送学習において受動的な傾向が表われるとしたら、それは

学校放送に対し娯楽放送聴取の態度で接しているからで、こゝに視聴訓練の必要が生じてくるわけである。

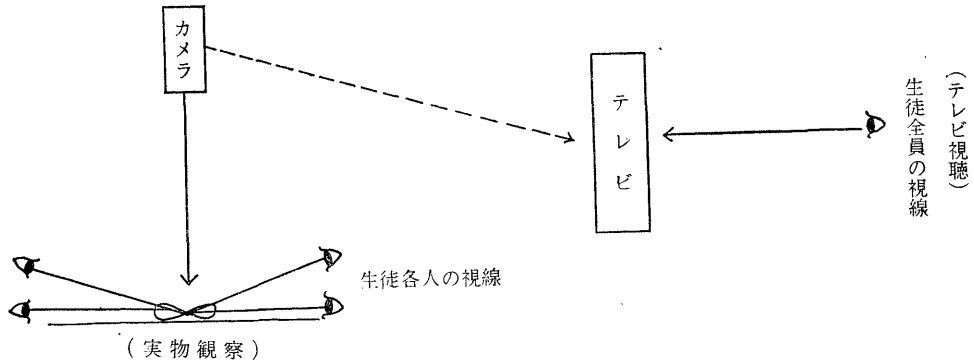
Ⅱ 代理性ということ。

学校放送に対する次の疑問は、その代理性という機能についてである。例へば「テレビやラジオで得た知識は自分の体を通して経験したことでないから、すぐに忘れてしまう。即ち間接経験は直接経験より知識、技能、態度の三点からみてもともに定着度が薄いように思われる。例えば社会科では現場学習の方がテレビで見るよりもよく、理科では実験をする方がテレビの実験を見るより定着度が高いように思う」いった意見に代表される。

このような考え方は、視聴覚教材の学習に於ける効果を知らない人だといわなければならない。人類の今日の発展が、実物体験から出発して Copy の世界を発見創造していった事に初まるということは否定出来ない。しかし余りに Copy に徹した抽象的経験学習即ち教科書という文字のみによる学習が可能であるという考え方に対する反省としての近代教育が提唱してきた方法の一つが半抽象、半具体的代理経験教材の学習利用である。そこで。放送学習も教師による直接経験学習の不足や、不可能な点を代理するのであって実物教育をより抽象化概念化していく為の段階として、或いは逆に文字的概念をよく具象化して理解する段階として利用されるべきものである。要は実物教材、放送教材の教材性の優劣の比較ではなく、各々その特性に応じた巧みな利用の仕方で行えばよいわけである。但し、非常に発達してきた視聴覚教材つまりテレビ等になると、実物学習以上の実感を与える教育が代理経験によっても可能となると考えられる。そうになると、例えば理科の実験に於いても、これは教師が手軽に出来るからテレビ視聴しないで教師の実物実験学習の方が効果的であるとは一概に言いきれない場合が生ずる。つまりテレビという映像機構の中に、教室教師が如何に努力しても、このテレビの特性には刃が立たないという点である。即ち、第一は、実験にそゝがれる児童生徒の視点の問題である。如何なる実験でも、最もよくその有様を観察出来る視点と、そうでない視点がある筈である。しかも最も理想的な視点は極く少数に限られる。例えば、ドームに於いてみるプラネタリウムの正しい位置は一点しかあり得ない。同じ動物の解剖実験でも、最もよく、教師の手ぎわや、実物の見える場所は限られていて、その他の多くは、実物に対しはすにみたり、上すぎたり下すぎたり、そうでなくとも腕が邪魔になったり、友人の頭が邪魔になったりして、正しい視点で観察することは出来ない、しかしテレビを初めとする映像教材は、実験の前に正しく据えつけられたカメラのレンズの位置が、教室全員の視点となるのであるから、テレビ実験は、全員が最も正しい視点から観察学習を行うことが出来るということである。

第二には映像がすべて立像として映るということである。教室の実験はすべて平面で行われ、それをカメラは垂直にうつし、それを受像機で直面に写し出してくれる。この方法によって生徒が実物ではみにくい部所の有様を正しくカメラで捉え、沢山の生徒達に正しい視点から観察させることが出来る（第五図）第三にテレビを初め映像教材はすべて枠づけがされているので、画面に不要なものまで提示しないので、視点が迷うようなことがない。

(第 五 図)



第四に、実物実験学習の場合、不必要な雑念が生じ易くそのため、見るべきものに対する精神の集中が行われにくい場合がある。例えば、かえるの解剖実験に於いて、見なければならぬ点は「腸から栄養を吸収するためそのまわりにむらがっている血管群であるとしても、実験者はそれよりも、「心臓がまだ動いている」とか「可愛想だ」とか「神経にふれると、ピリピリ足がけいれんする」とか又は「変な生臭い嗅いがする」等々の雑念によって、肝心な点への集中がにぶくなる恐れがある。しかし乍ら、これをテレビを見る時は、テレビが示した視点のみに精神を集中させることが出来、比較的雑念に捉われないで所期の目的を達することが可能である。このように、放送学習特にテレビはその特性を通して正しい理科の思考力を延ばしていく力を持っているものである。

更にテレビは未だ発見されていない新しい教材としての可能性を未だ多分に包蔵しているであらうことが想像され、将来その特性の開発、発見によって、学校放送の教育性は限りなく進展していく可能性のあるものとしてながめたいものである。

Ⅲ. 力動的であるということ

旧来の教材というものは殆んど静的なもので、その中にはフィルム教材の様に、多少動きの要素が加わっているものもあるが学校放送は、一学校や一教師の意図にかゝりなく、特定の目的のもとに絶えず独自の活動しているものである。こうした働きのあるものを利用するためには、汽車や自動車に乗る場合時刻表を利用するのと同じく、学校放送時刻表を尊重しなければならない。そのためには、一学校や一教室だけで今までの様に勝手に週間の時間割を作ることが出来なくなり必ず学校放送時刻表を中心として作っていくことが要求される。その上伝達は一方的でしかも一回限りで消え去ってしまうものであり、又あらかじめ内容を検討することが困難なのであるからいままでの教材観からいえば、放送学習の教育性は、殆んどあり得ないと言わざるを得ない。

この様な欠陥に対して人々は、学校放送独得の教育的特性を別に多々示すことにおいて、それとの相殺において尚且学習効果があると主張するのであるが、^⑩今一つの見方は、その欠点自体が学校放送の特徴であり、長所ともいえるという考え方である。例えば旧来の時間割りによる学習に慣れた児童生徒達は時間というものに対する観念が非常に薄かった様に思える、即ち彼等が学校において最もよく注意しなければならない時刻は、始業開始時刻だけで、以後は学校の鐘やサイレンを合図に一方的に時刻を知らせる仕掛になっている。それが学校放送を利用することに

よって授業時間中でも突如として初まる番組の時間をいつも注意しなければならないので毎日の学校生活の中で時間の観念が教師生徒共に必要なものとなってくる。

斯くして放送利用の学校が各教室に時計を、運動場に大時計を設置しなければならないとなった事は、只単に放送利用の便宜の為ばかりでなく、今日の社会生活がすべて時間を基調として動いている如く、教室の学習も時間が非常に大切であるということを眼のあたり実践を通じて理解させていることになるのである。

次に放送教材の欠陥と考えられている一過性という性格については、学習は確かに、文字による学習のように、わからなければわかるまで何回も同じ箇所止ってそこを熟読玩味することが非常に大切なことは勿論である。しかし乍ら、今日の様に多忙で複雑な社会生活の中にあっては、すべてのことがらについてゆっくり時間をかけて学習をする予猶が少くむしろ、時間の流れのまゝ伝達されるメッセージを、その動きの中で瞬間的により深くより広く学習出来る能力が要求されているのではあるまいか、又ゆっくり事の結果を考えて回答を行う予猶もなく、即座に何等かの回答がせまられる場合が多いのではないだろうか。この様な現状を考える時、学校放送によって瞬間的に消え去るものを瞬間的に正しくつかみとる訓練が出来るとすれば、放送の一過性は、新しい学校にも必要な教育的価値をもつものであるといえよう。又予め内容を検討出来ないという欠点に対しては、学校放送番組の内容に信頼が出来るものであれば、教師も生徒と共に生でぶっかっかいき、視聴の中で視聴後の指導或いは教科との関聯を考え即座に教師計画の学習の展開が出来るような教師自身の視聴訓練も必要であり、望ましいことといわねばならない。教師は本来充分な下準備や学習計画にのせて授業は行ふべきものであることは当然であるが、毎日自分の授業について詳細な学習計画を行う他に、放送の下見もしなければならぬし事前、事後指導の計画も立てなければならぬとするならば肝心の教師自身の授業の下準備がおろそかになるのを恐れなければならぬ多忙な教師にとっては、教室で生徒達と同時に見て、教師の学習を **enrichment** する学習効果が得られてこそ、教師は何のためらいもなく自由に放送を利用することが出来るのではあるまいか。

IV. 考えさせないということ

放送学習特にテレビ利用の学習において思考力がつかないのではないかという不安は非常に多い。この問題は先に「代理性ということ」「受動的ということ」に於いて既に或る程度の解明をしたつもりであるがそれでも尚、学校放送に批判的な人達からは、次の様な意見をよくきくことがある。即ち「自己完結したものを表現し伝達するので、視聴者は自ら生産、再生産の緊張を経験することなくその結果、空想力、想像力、表象力、即ち思考力を弱める」と、この論旨に対しては、マレッケの反論を借りると「いかにも、人生における空想や想像や表象の意義は大きい。人間は一つにはこれによって未来を予見し、現実の生起に先立って行動を起すことが出来るし、二つには、過去、現在、未来を超越した世界に生きることが出来る。それは人間の真の本質である。ところで、テレビの映像表現がつねにこうした人間能力を弱めるという断定は、どういう根拠に基いてであるか。映像表現の本質は、それが芸術的創造的表現たらんとするかぎり、一度きりの具体と個の表現によって超時間的、超個的、普遍的な意味を伝えるにある。表現力の強い映像は

見るもののファンタジーに余地を与え、これを撃発するものである」⑩と、即ちテレビは受け手の想像力や表象力ひいては思考力を撃発する力をもっているといつて反撥しているのであるが、しかしその力は、送り手の意図や送り内容如何によって大きな異りがあることは当然のことであらう。学校放送が、科学的思考方法の段階を踏み乍ら、しかも常々児童、生徒という立場からの考え方をリードしていく巧妙な映像学習であるので、これに児童生徒側から、積極的に放送学習を迎え入れる視聴態度が出来上っていさえすれば、思考力を弱めるという危惧を感じない筈である。

更に映像による思考は、文字の様に論理的に積み上げられた思考法の外に、直観による学習が行われる。直観とは一般に「思惟の働をまたないで対象を直接とらえる作用」⑪をいうのであって、感覚的、情緒的な形で物の本質を見抜く力である。しかし、たゞそれだけであればそのもの自体をたとえ正しく把握したとしても、論理性がないので、発展性、普遍性に欠け人類文化の発展に寄与するには至らない。近代教育の父といわれるペスタロッチは、この直観を教育の本質とし乍らそこから、能動的自発的学習に発展させていったところに、今日の教育学の発展があるのである。映像を中心とするテレビ学習に於いては、その直観的把握を重視し乍ら、その感じ方を、科学的思考法によって、理性化する働きを行っているのであってこのように行われる放送学習が最も、合理的な正しい思考をさせる学習の型態であるといえよう。

V. 興味本位であるということ。

一般テレビ放送が、興味本位、娯楽本位に流れるのは、大衆がテレビに娯楽を求めているからである。学校放送は決して興味本位ではない、むしろ学習本位である。しかし乍ら学校放送の内容は旧来の教室授業の様に味もそっけもない知育一点張の学習ではない、むしろ学習への動機付や能動的な働きを促すため、児童生徒の興味を十分にひきつけるという新教育理論を忠実に実践し展開している。そこには、国語教室の時間に楽しい歌が入ったり、社会科のテレビ番組が、みている児童生徒をして全く夢中にならせるような、ドラマの世界に導いてくれる。斯くして、知らず知らずに学習への強い動機付や積極的な態度がつけられていくのである。以上のことから「放送学習が興味本位で学習効果が少い」という考え方は、テスト中心の暗記、暗誦を学校教育の最大任務と考える中世以来の伝統的教育法の欠陥にいまだ目覚めない人達であるといつてよいかもしれない。

VI. 機械性ということ。

学習の機械化ということが何か豊かな人間味の欠乏したロボット的人間を作り上げる教育であるかの様な感じをもっている人達は意外に多いようである。人間の教育は本来生身の人間同志の直接のふれ合いを通じて行われるということは正しい。しかし教育内容が今日の如く複雑化してくると、一教師で教えられる限度はきまってくるのが当然である。しかも一人の教師で教えるべき内容が複雑になり細部に分割化してくると、教育は枝葉末節に捉われて本来の目的や意図が見失われてくる場合が多い。更に現代の社会における機械化文明の進展はその止るところを知らず明日の社会の変遷すら誰も予測することが出来ない状態であれば、今日の教育界でもあるべき理想社会をえがき、それに従つて目標をたてることが非常に困難となってくる、「期待された人間像」に於いても、その批判の一端はこれを作つた人々の年代層と受け入れ側の若い人々の将来に対

する予測の仕方の異りから来ていると思われる。この様に社会の組織化機械化が極端になると人間疎外が起ってくる。こうした動きから再び人間社会を人間の手に取り戻したいという希望はどの年齢層にもある筈である。この人間性の回復ということが教育ではどのような手段を用いることによって可能となるのであろうか、我々が理想とする個人対個人の教育は、学校はおろか家庭に於いてさえ充分に行われているとはいえない。母から躰けられる時間より子供はテレビから教えられる時間の方が多いためである。そこで学校教育が教育に人間性を復活させるためには細分化された学習内容のうち、機械が充分学習効果をあげ得るものを選んでこれを機械化することに努力することによって、本来教室教師でなければ果せない教育のみに専念することが出来るわけである。こゝに学習の整理統合が行われ、人間が教育に果さなければならない分野と、機械が人間にかわって果してくれる分野を明確に区分することができ、それが実は教育を機械から人間の手に取り戻す唯一の手段であると考えられる。

以上私は学校放送の教育性を「マスコミ的伝達方式について」「受動性」「代理性」「動いているものとして」「思考力」「興味本位ということ」「機械性」という7つの面からその可能性を論じたわけであるが、進展して止まない人間文化は更に新しい教材や人間にかわる教育機械を生み出してきていく筈である。我々はこれらが人間性の疎外をもたらさぬかどうかをはっきりみきわめることは必要でも、いたずらに教育を個定化した考え方から新しい教材や教育方法の欠陥を指摘するだけでなく進んで此等の欠陥を補ったり改良する努力を重ね、積極的な利用法を展開していく事が、新しい時代の教師に負わされた重大な任務であると考えるのである。

学校放送の教育性を高めるための利用方法

従来学校放送に対する一般教師の考え方は大体三つのタイプに分れるようである。第一のタイプは、前節で縷々示したような特性を放送が持つ限り、教材としては不適當であるという立場から、その教材の利用を拒否している人達である。第二のタイプは、利用するからには、他の教材と同様入念な番組の選択は勿論、事前に可能な限り、視聴をしたり、テキストで研究し、自分の授業とどの様に関聯させるかという精確な計画案を作った後初めてこれを利用するといった、努力型の教師である。第三のタイプは、子供達が見て学習に役に立ちそうな番組が放送されているので、兎に角みせよう。見せる限りは、自分の授業を受けている以上の熱心な態度でテレビ学習を行うような視聴態度の訓練は行うが、毎日の自分の授業とどの様に関聯させるかかいうことは余り重視しない、学期の最初に教科との関聯を計画しさえすればあとはテキストを事前のぞく位いの努力しか実際には行わなくて、学校放送を受入れている、というのんびり型の教師に別れると思われる。

第一のタイプは此処で別に説明する必要もないが、問題は第二のタイプである。このタイプの先生は非常に良心的で熱心な先生に多い正に毎日毎日が研究授業をやっているような努力を傾けていられる人々である。この人々が学校放送で問題にするのは、学校放送初まって以来今日まで未解決の問題として悩んでいる「カリキュラムと合わない」といった問題に初まり、「前以って充分に研べることが出来ない」「何が出てくるかわからない不安」といった問題である。

しかしもうぼつぼつこれらの問題にはっきりした解決が与えられてもよいと思う。勿論、学校

放送も、教室の教師の教科書も学習指導要領に準拠しているのであるから、その関聯表を作るぐらいは何でもない。問題は一時間の教師の授業の中にうまく「はめこむ」という事が非常にむずかしいという点にある。従来の各種教材はすべて教師の一時間の授業に完全に位置付けが出来るようにあらかじめ作られていたのであるが、放送学習は、それ自体自己完結を行う能力を持っているので、教師が自由に料理出来る性質のものではないのである。それにも拘らず正にフィルム教材と同じ様にこれを教科書の中に位置付けをしようと努力するところに無理があるわけである。かつて来日した、オハイオ州立大学のキースタイラー博士は、「学校放送の特性として、番組が教材内容とぴったり合っているのではなく、広くゆるやかに結びついている」といっている。この放送の本質を認めないで、位置付けの事ばかりに腐心して、テレビ学習が与えようとする、独自の教育内容の問題については殆んど忘れられてしまっているかのようである。問題は、教科書中心で行う教師の授業が持たない学習方法や内容を放送が持っていることを認め、それを学習に利用することによって児童生徒の学習効率を尚一層高くすることである。いたずらに「教科の位置付け」や「この番組は導入に使うのか、展開につかうのか、それとも整理の段階なのか」というように、教科書中心の教室授業に都合よくはめこむ努力をしようとする。しかし、教科書は国定時代のように単一ではなく、沢山の夫々特色のある教科書があり、進度も全国まちまちであるので、ダイナミックな放送教材がその夫々の教室授業にぴったりはまり込む筈がなく、それを求める方が無理というものである。そこで今度は自分の授業を放送の時刻表に合わせようと努力するが、これも特定の場合を除いて、フィルム教材の様に完全に教科に位置付けすることは全く不可能といってもよいであろう。ところが、一方視聴者側の教師のこういった要求が全国津々浦々より放送局の方に集ってくると、現場の要求するものを送り出すべきだとする送り手側の弱身から制作者の方でも、資料的内容を中心とした番組を作ったりして番組の質を落したり、或いは一現場教師がうまく授業計画にあてはめるために書いた授業計画の一端を放送テキストに掲載したりすることによって、放送利用者を増々困乱に落とし入れたりしているようである。学校放送が若し教科に位置付け易い資料内容を中心とした番組であれば、それは決して、フィルム番組以上の効果をもつものにはならないだろうし、又このような番組でよければ、製作者側は毎年無理をしてまで番組を作らなくとも、一年分で毎年繰り返し再放送を行えばよい筈である。放送学習は、教室教師と異った方法や考え方で学習を展開するところに価値があるので、そこには新しい教育の可能性とか、教室授業で発見出来なかった未知のしかも新時代に測応した教育方法等をみいだしていくかもしれないのである。このようにして学校放送は教室教師の不足を補うばかりでなく、二重の学習効果をもって、知識を正確に正しく定着させることに大いに役立っている筈である。

この様な点から第三の、のんびり型の教師の利用方法は、その動機の如何にわゝわらず、比較的好ましい方法であるといわなければならない。近年ますます発達していく科学文化は学校に於ける理科教育その他においても、新しい技術機械を導入利用したほうがもっと学習効果が上であろうことはわかっているが経済的な問題や、利用技術の点で、現在の教室教師では利用できないかもしれない。又英語教育などで、そのことばを母国語としている人々を教師とし学習をうけ

るならば、もっと効率が高くなることはわかっているけれども、現在の公立中高等学校では不可能に近いことである。ところが放送では、そのような新しい複雑な機械をとり入れた実験でも、外人による生きた英語の学習でも、今自由に行っているわけで、このことは、自分の学習の拭いがたい欠陥を補う意味で学校放送という形で教師を教室に招請し、自分と別個に授業をして貰っていると考えれば、それが自分の一時間の授業計画の中にあてはまるかどうかは問題でなく、指導要領が要求している学習内容をより完全に実施するため方法として学校放送をも利用していいという大所高所の目標があればよいのである。この考え方で継続視聴を行ってれば、毎日、毎週の番組に一つ一つ目を光らせて番組を学習に取り入れる下準備に多くの時間を費す必要もないと思われる。しかし此の場合それを可能ならしめるためには、児童生徒の思考力を働かせるような正しい視聴態度が出来上っているという条件が必要である。学校放送を視聴するという事は単にテレビをみている、ラジオを聞いているとは違う。放送中の教師といしょって学習しているのだという積極的態度が出来上っているかどうか、放送学習を成功させるかどうかの決めになる。そのための条件として、少くとも、先づ、完全な画面、完全な音質を備えた放送機材であることで、雑音の多い音質の中で正しい学習効果は得られるものではない。第二に、教師は最も熱心な視聴者であること。我関せずの無関心の態度は、児童生徒の向学的態度をひどく損うものである。第三には、視聴前、中、後の適当な助言であろう。こうして放送利用学習ということは教室の教師を、現場教師とテレビ教師或いはラジオ教師というように「複数教師制」の授業とも呼び、或いはタイラーのように⑬教室教師と放送教師がチームを作って、チームティーチングを行うことによって、学習になお一層の分化発展を期待することが出来るというものである。

以上のほか、学校放送でいま一つ問題となつていることは、事前指導、視聴中指導、事後指導のあり方であるがこれについても、教科の授業にはめこむための一連の作業であれば必ずしも必要ではない。しかし、放送それ自体の学習効果を上げるために教師が入念な下研べをし、放送内容の解釈、注意すべき点等を指滴するという事前（直前）指導は必ずしも不必要とはいえない、場合によってはこれが、好ましい積極的視聴態度を作り出すことになるかも知れない。更に視聴中適当な指示を行うことも必要であり、又事後指導として、放送内容を再生させて確認させたり、自分の授業との関聯を計画したり説明したりすることもあるだろう。しかし、このような手段がなければ、放送利用の価値はないとか、「みせつ放し」であるとか、指導がされていないから学習にはならないとして考えるのは問題である。元々学校放送は教師がどうしても行い得ない授業の不足を補足する役目をもって出現した筈のものであるが、実際の利用の場において、教師の方が放送学習を補足してやらなければ学習にならないということになるとこれは本末転倒であり、又放送学習がこのように多大の教師の努力を条件としなければ効果が上らないとすれば、たとえ利用しようとしても多忙な現状の教師ではやれないのではないだろうか。人間社会の科学的進歩はたゞ無暗に費されたエネルギーによってではなく。「最少のエネルギーによる最大の効率を求めんとする」ところに生じてきたと確信する。教師が自己の手ずからの努力のみを最大の価値とみなしていると、それは「最大のエネルギーによって最大の効率を求めん」とする名人芸或いは手工芸に終り、このような教育の伝統的な道義が教育の発展を遅らしてくる恐れも考え

なければならない。放送学習に於ける最少のエネルギーとは、①利用番組のねらいや目的を事前研究して、放送を利用することが、教室の児童生徒の学習効果をもたせることになるかどうかを知ること。②継続利用を主体にするための放送利用の学習時刻表の作成③最少限度の事前事後指導とそのためのテキストによる下研④児童生徒の視聴態度を訓練する、特に放送教師の呼びかけに対する反応等、位でも相当の効果が期待される筈である。若しそうでなければそれは番組が悪いのであって、努力すべきは番組制作者の側である。もとより、教室教師の入念な放送の事前指導や事後指導は、放送の学習効果をもっと高めるかもしれない。しかし、我々は放送教師の後始末に窮々とするより、それだけの時間はむしろ自分の授業の計画や準備、展開に使うべきであって、原則として放送はあくまで、テレビ20分ラジオ15分に各々前後指導に5分位を加えた時間で止めるべきである。そうでなく多くの時間を放送に食われて教科の授業に不足を来すようなことがあるとすれば、これ又機械による教師の主体性の喪失という我々の最も恐れている人間疎外の教育に近づいていくことになるのである。

参 考 資 料

- ① 放送文化研究所「放送学研究」8巻 P.25
- ② この方面では種々の研究や調査が行われているが、代表的なものとして
Joseph T.Klapper : The Effects of Mass Communcation `charter VIII. The
Effect of Adultine fare on child audience" や, Schramm Lyle Parker ;
Television in the lives of children. 我が国のものでは
石田光, 森田昌樹, 蜂屋正秋, 編著
「マスコミは子どもを変える」等
- ③ 平凡社「教育事典」2巻 P.1
- ④ Gerhard Maletzke `Psychalogie der Massenkommunikation、NHK、放送教研究室
訳 P.30
- ⑤ 同上 P.58
- ⑥ KATZ,ELIAU & LAZARSELD, Personal Influence|955.
- ⑦ 前出 J.KLAPPER, The Effectsof Mass Corm, Chapter IV. Conversion P.62
- ⑧ 日本放送協会放送基本準則
- ⑨ 「思想」1958年11月号 波多野完治「テレビジョンと教育」 P64
- ⑩ 文部省発行 1966年「学校放送の利用」 P.14
- ⑪ 白根孝之「テレビの教育性」 P.59
- ⑫ 平凡社「教育事典」 P.245
- ⑬ 国際基督教大学学報「放送教育研究集録」IX.キース・タイラー「現代の教育と放送の役割」 P.18